共感性が「情緒的巻き込まれ」及び精神的健康に与える影響

－共感性の種類に着目して－

○米川萌・生塩詞子
（安田女子大学大学院文学研究科）

研究の目的

共感性には，「他者の感情状態の共有や同情などの他者指向的な感情の生起のこと」とされている情動的共感性と「他者の心的状態を推測すること」とされている認知的共感性の2つがある（日道他，2017）と言われている。情動的共感性は，下位因子である［感情的温かさ］と向社会的行動の間に正の相関がある（菊池，2014）一方，共感性及び情動的共感性が高い者は，低い人に比べて特性不安を高く持っている（大庭，2010）ことが明らかにされている。認知的共感性は，認知的共感性の視点取得は自尊感情との間に正の相関がある（日道他，2017）ことを明らかにしている一方，認知的共感性が維持されていても，感情的共感がなければ，他者の情動を読み取る能力が悪用される可能性が示唆されている（溝川・子安，2017）。これらのことから，上記2つの共感性のバランスが重要なのではないだろうか。また，本研究で着目した「情緒的巻き込まれ」は基本的には他者との関係において情緒的に動揺しながらも献身的行動に携わり，そうした関わりに重責感を抱くといった特徴がある（鈴木・小川，2001）。この「情緒的巻き込まれ」は，所謂「共感性が高くて辛い」にも該当すると考える。

そこで本研究では，情動的共感性と認知的共感性のバランスと「情緒的巻き込まれ」との関連を検討することを目的とした。

方法

1）調査対象者：有効回答 114 名（女性 80 名，男性 34 名，平均年齢 28.14 歳）

2）調査方法：Google Form を使用した Web 調査

3）調査内容：①性別・年齢②情動的共感性尺度（加藤・高木，1980）の「感情的暖かさ」「感情的冷淡さ」③認知的共感性尺度（今野・小川，2012）の「視点・役割取得」「想像性」④「情緒的巻き込まれ」尺度（鈴木・小川, 2001）⑤General Health Questionnarie（GHQ）−12 項目（本田他，2001）

結果と考察

本稿では，得られた結果の一部を報告する。

情動的共感性得点と認知的共感性得点について，それぞれの中央値（情動的共感性：*Med* = 10.25；認知的共感性：*Med* = 8.13）をもとに高群と低群に分けた。これらの組み合わせから 4 群に分類し，それぞれ HH 群（高情動的共感性・高認知的共感性），HL（高情動的共感性・低認知的共感性），LH 群（低情動的共感性・高認知的共感性），LL 群（低情動的共感性・低認知的共感性）と名付けた。なお，情動的共感性尺度の因子分析を行った際，［感情的温かさ］と［感情的冷淡さ］の因子間相関が負の相関であったことから，［感情的冷淡さ］に対して反転処理を行ったうえで［感情的温かさ］と［感情的冷淡さ］の因子得点を合計した。

情動的共感性と認知的共感性のバランスと「情緒的巻き込まれ」との関連について検討するために，独立変数を情動的共感性と認知的共感性のバランス 4 群【HH 群，HL 群，LH 群，LL 群】，従属変数を「情緒的巻き込まれ」尺度の合計得点とした，1 要因分散分析を行った。その結果，共感性のバランスの主効果が有意となり（$F(3, 42.75) = 4.23$，$p < .05$），多重比較（*Holm* 法）の結果，HH 群（$M = 15.54$，$SD = 0.52$）が，LL 群（$M = 12.90$，$SD = 0.52$）よりも，「情緒的巻き込まれ」になりやすいことが示唆された（$t(110) = 3.59$，$p < .05$，$d = .78$）。

本研究では，認知的共感性と情動的共感性が同じ高さであれば，「情緒的巻き込まれ」は抑制されるのではないかと予測していたが，予測に反する結果となった。増田・田爪（2018）によって，認知的共感性の「想像性」は，積極的な認知行動というより，情動に巻き込まれている状態であるかのような項目が含まれていることが指摘されている。このことから，本研究における「想像性」因子も適切に認知的共感性を測定できていなかったことが考えられる。

主な引用文献

日道 俊之・小山内 秀和・後藤 崇志・藤田 弥世・河村 悠太・Davis, Mark H.・野村 理朗（2017）．日本語版対人反応性指標の作成心理学研究，*88*，61-71.